
狂イ始メタ齒車。

ひとこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂イ始メタ齒車。

【Nコード】

N0032I

【作者名】

ひとこ

【あらすじ】

誰かが壊した壊された。触れなくて良い齒車に誰かが触れた。力タンと音を立てて一瞬時が止まった。狂イ始メタ齒車。

登場人物／設定（前書き）

あらゆるところにひぐらしの影響があります。
それを任意で読んで下さい。
殺人などもやっています。

日和キャラはそんなことしない！

という方はお戻りください。
どうぞスルーしてください。

（これは設定ですので本文とは違います）

登場人物 / 設定

登場人物・設定

小野 妹子 13

パニック障害、解離性遁走。

親から虐待。小学校には行っていない。

太子達と離れると少しパニックを起こす。

かなりの演技派。嘘が得意。

聖徳 太子 15

特に障害はないが、強いて言うならホコリアレルギー。

大金持ちの息子（性格は原作と同じです）。

親が閻魔や妹子のことを屈辱するので、殺した。

緑既 閻魔 14

二重人格。

太子達のことぐらいしか信じていない。

いじめ、虐待経験者。

鬼男君 LOVE。

天河 鬼男 13

鬱、PTSD（外傷後ストレス障害）など。

過去に親、親類全般を目の前で殺され、PTSDに。

河合 曾良 12

薬物依存症、不眠症。

親が薬物を吸っているのを見ていたら、自分も吸わされた。

それから、薬物依存症に。

現在治療中。

・ } ・ } ・ } ・ } ・ } ・ } ・ } ・ } ・ }
・ }
・ }

太子の親の権力が残っている電気会社で、携帯を使っている。
お金も住む場所も、すべて太子の親の物。

登場人物／設定（後書き）

ビュースリ（略してます）の五話完成してないんで、ヒマ潰し、気分転換に書きに来ると思います。
なので更新遅くなります。

もしかしたらこっち寄りを書いていくかもしれません。

一話 クギラレタモリ（前書き）

警告は設定の前書きでやってます。

アホ作者のへんな文です。

期待しないでください。

ひぐらしの影響があったりします。

一話 クギラレタモリ

まるで夢のように
くるくる回って
粉々になった。

どんなに丈夫な物でも
バラバラにしちゃえばただの破片。

人間もね。

「妹子ー！ってあれ、無視かな？」

「そうじゃありません。太子には聞こえない声で返事をしました。」

妹子が馬鹿にしたような目で見る。

何？今笑ったよ（目で）！何でこの状況で！

「たあー！ー！いいー！しゲホッ・・・むせた。」

閻魔が私の背中に飛びついた。

私は驚いて妹子に飛びつく。

「ギヤアッ！！出た！妹子！」

「こんな昼間からでるか！このアホ太郎！」

そう妹子が言った瞬間、間延びした連絡音が鳴った。

『急遽、会議が行われる事になりました。担任に従い、早く帰りましょう・・・』

「やったっ！午前じゅぎょー！」

私のはしゃいでいたら、閻魔が私を肘でつついた。

「ねーねー、家帰ったらさ、あの森行かない？久々に行きたいんだよね。」

「おっけーい！着替えなくても良くない？ね。荷物とか、どっかに
おいときゃいいじゃん。」

「それもそうだねー！おーい妹ちゃん！鬼男君！曾良！森行くよ！
今から。」

私達がちらつと振り向いたら、曾良は無視、妹子と鬼男は呆れ顔だ
った。

私達が来ると、森は歓迎するかのように音のない風をふかせる。

「あーまだあるー！良かった！」

閻魔が大木のくぼみに腰を下ろす。

妹子や鬼男はまるで子供みたいに上へと登り始めた。

「僕らが小さい頃よく登ったよね。」

「久しぶりに登ったよ。曾良は来ないのかー？」

「私が行くぞー！」

私も急いで登った。

この木は上のほうも太い。

しかも、昔彫った足場が残っていて、早々と登れる。

「あ、学校が見える。」

「なのに音しないな。」

車の音とか、騒いだ声とか、聞こえそうだな。だけど、森は区切られているかのように風の音しかない。

「何か、怖いなあー。」

もうすぐ10時になる。

何時間遊んでいたんだろうか。

「あれ、あれ、太子？どこですか？」

「え？」

いきなり妹子が辺りを見わたしはじめた。

「声、声も聞こえないよ、誰でもいいから、何かしゃべってよ。」

「妹子？どうしたんだよ？」

鬼男があわてて妹子を揺さぶる。

「だれ、え、誰なの？太子？鬼男？」

「妹子！どうしたの？私はこっちに・・・」

閻魔と曾良が騒ぎに気づいてあがってきた。

「どーしたの？太・・・あ、妹ちゃんか、そうか。」

「どうしよう、どうしよう、怖いよ、暗い所は嫌い、嫌だ嫌だ！」

妹子はそう叫ぶとうずくまってしまった。

「妹子さんを連れて帰って、寝かせてあげましょう。」

「そ、そうだね、うん。」

私はやっと思い出した。

妹子のパニック障害。

だから閻魔はあんなに冷静で、ああそうか。
分かってしまうと簡単だね、うん。

「なあ、妹子はどうしたんだよ、曾良？」

「妹子さんは、精神病の一種ですかね、パニック障害って知ってます？」

「え、うん。大体は。」

「そうですね。鬼男さんとはちょっと違う病です。」

鬼男はそれから家に帰るまで喋らなかった。

私は閻魔と騒ぎながら帰ってたけど。

一話 クギラレタモリ（後書き）

長かったり短かったりします。
更新ペースは遅いですね。ハイ。
文書くのが遅いんです。

二話 イゾンシヨウ（前書き）

意味分かんと思います。

作者の都合に合わせてるんでw

ギャグとシリアスの妙な混ぜ合わせです。

二話 イゾンショウ

「起きろゝ妹子！起きろゝ！！」

「そんなことしたらうなされます。」

「何だと！ガーン」

「ガーンは付けない方がいいです。」

「ダメ出しすな！」

鬼男は帰ってからはずっと何か考えていた。
何となく分かるけどね！

「そんなダメ出しせんでも・・・ねえ？閻魔？」

「ひい、ふう、みい、・・・俺達が殺した親つてさ、4？」

「そうですね。僕の所は死んでませんから。」

おいおい、なんでそんなこと考えてるんだ。

「閻魔！今は妹子の無事を考えてよ。」

閻魔は困ったように笑った。

「だって、明日釈放されるんだよ、曾良の親。」

「閻魔、見て、あの家。」

私達が小5の時、曾良に出会った。

なんで今は中3視点で話してるのかは察してね！

「うわぁ、最悪。」

窓から見えたのは、女と男。

袋もって、ダラーっとしちやってさ。

薬だね。

「昼間からよくやるよー。」

「もういいじゃん。帰ろう。」

「え、ちょっと待って、子供いるよ?」

「ええ?」

ドアの隙間にちよこつと見えたのは、同じくらいの子。

「あ、気づいた。」

「あら?。」

男女がその子に気づく。

その子はびっくりして暴れてたけど、殴られたりして、大人しくな
った。

声は聞こえないけど、薬を無理やり吸わされてた。

「私達らしくないけど、通報してみる？」

「・・・うん。その男女も分からないだろうからね、子供の事。」

「今日の私達は私達らしくないなあ。」

「そうだねえ。」

警察が来る前に、その子連れて家に帰った。

通報されるべきは私達なんだよね。

誘拐だよね、これ。

でも気絶してたし、全然知らない所で育てられるのも可哀想だし。

「誰ですか、貴方達は。」

「あ、起きたあ！閻魔ー！」

見知らぬ小6が目の前にいたらびっくりするよね。

「それで・・・僕の母と父はどこです。」

「うー・・・ん。それがさあ、捕まっただよね、警察に。」

その子が目を見開く。

でもちよっと嬉しそうな気がする。

「そうですか。それと貴方達の関係は？」

「通報したのが私達なんだよね。」

「・・・見たんですか。」

「・・・薬？」

その子が小さく頷いた。

すると、閻魔が歩いてきてその子の横に座った。

「吸わされてたの？」

「・・・。。。」

その後、閻魔がその子を質問攻めにして、3分ほどたった後、ようやく口を開いた。

「僕が初めて吸わされたのが今年の夏です。」

「へえ・・・。」

「変な気分でした。気づいたら朝で、追い出されるように学校に行きました。」

嫌だった。

だけど、吸わないと落ち着かない。

自分で吸うのは嫌だった。

薬を吸っている親達を見ていたら、勝手に吸わされた。

こうすれば全部親の責任になる。

「簡単に言うところですよ。」

「変な依存症のなり方。」

「そういう病気なんですか。」

そうそう、と閻魔が答えた。

「少し尋ねますが、僕を此処に連れてきたのは、何ですか。」

私が答えようか迷っていると、閻魔が答えた。

「可哀想だから。君がね。・・・俺も可哀想なんだよ。だから此処にいるんだ。」

「・・・・・・・・。」

「閻魔・・・・。」

「ねえ、此処に住まない？どうせヒマでしょ、君。」

閻魔がクスクスと笑った。
怖いなあ。

「・・・まあ、いいでしょう。変質者かと思いましたが。」

「酷い。」

そうして、この家、私の別荘・・・？なんだけど、住む事になった。
例の親たちは8〜9年の懲役だと、噂が流れていた。

「曾良の親は、金払って・・・釈放されるらしい。」

「金はどうやって手に入れたんですか？僕の家はそんなに金持ちじゃありませんでした。」

「もう3年ぐらいたってるもんね。捕まってから。」

「薬の出所の奴が払ってやったんじゃないのか？」

聞き込んで見たら、鬼男の言ってた事が当たった。
そこで、私はこんなことを考えた。

「そいつら、全員殺っちゃおうよ。」

みんな賛成。
決定だね。

二話 イゾンショウ（後書き）

妹子は次話ぐらいで起こしますw
次は殺人系になるかもしれません。
親とか詳しい過去は後々出てきます。

三話 キョウキトアソビ（前書き）

妹子起こしました。

てか五か月ぐらいまえの話で、しかも一ヶ月ぐらい前書いた続きを
かけ、ってなっても困るばかりでした
今恥ずかしくて一話が見れませんww

三話 キョウキトアソビ

「え、太子妹ちゃん担いでいくの？」

「うん・・・パニックだしさ・・・起きた時私たちがいた方がいいでしょ？」

「あーうん・・・そーだよねえ。」

まだ一向に起きる様子のない妹子を担いで、家を飛び出した。外は少し暗いけど、鬼男は起きてたし、曽良は起きていたところか寝てなかったらしい。

もうすぐ朝になる、すぐに済ませないと。

私たちは閻魔がどこからか手に入れてきた情報を頼りに、目的地まで走った。

「ね、ねえ釈放される時間でいつ？そこまでは分かんない？」

「ちよつと待つて、教えてもらったハズだよ・・・」

「あ・・・あれじゃないですか。僕の親。」

「え、こんな堂々と出てきていいもんなの？」

歩きながら隣の男と楽しそうに話している。

「僕の目は嘘をつきません。あいつらで間違いないです。」

閻魔は楽しそうに小さめのナイフを取り出す。

それが合図とでもいうように鬼男もガムテとロープをだした。

「太子は妹ちゃんと待っててねえ。すぐ終わるよ。」

「僕が・・・殴られてきてあげましょうか。油断するでしょう?」

「曽良がいいんなら。」

曽良は小走りに親のもとに行った。

しばらく会話した後、男は曽良の腕を乱暴につかむと、地面にたたきつけた。

よっぽど挑発的なことでも言っただろう。

閻魔と鬼男が曽良のところへ走っていく。

あっという間だった。

二人を人気のない場所まで誘導して、閻魔が切りかかる。確実に急所を狙って、声なんてあげる間を与えずに。

「死ねっ！早く死ねえっ！！」

曽良が叫んだ。

そんなにひどいことされてたのかな。
その時、後ろから声が。

「た、太子?え?」

「お、妹子、起きた?」

「閻魔さんたちは・・・どこ？」

「大丈夫、朝飯買いにただだから家にいるよ。」

私は閻魔に「私より先に帰って着替える。」とメールを送り、朝飯を買ってから帰った。

「あ、妹ちゃん起きたみたい・・・。」

「曾良、髪の毛落とさなかったか？凶器は持って帰って捨てろよ。」

「大丈夫ですよ・・・こいつらの親はとくに死んでるし、気づく人はそうそういないですよ。」

「じゃあ、池にでも捨てるか。これ。」

閻魔が死体を指さしながら笑った。

「それが一番ですね。イカにしちゃあいい考えだな。」

「イカと・・・！！鬼男君ヒドウイ・・・。」

死体を始末して、一足先に家に帰った。

後は妹ちゃんが勘づかなければいい話だ。

「おー帰ったぞ閻魔ー。」

「妹ちゃんと太子お帰りー！ああっ！朝飯だ！早く食べよ！」

「そうですね。もう朝じゃないですけどね。」

「あのー僕、いつから寝てました？」

「一日くらいじゃない？俺の記憶によると！」

変に自信のある閻魔の言い方に、妹子は思わず笑みがこぼれた。閻魔も笑った。

人を殺した時の冷たい笑いとは裏腹に、明るい笑顔だった。だれも閻魔の狂気になど気づきもしなかった。

・・・いや、気づきたくなかったのだ。

三話 キヨウキトアソビ（後書き）

曾良君キャラ崩壊WWW

いやあやっぱ小説は書きやすいかも。

四話 イツワリノエミ（前書き）

今回は短め。

閻魔さん発狂タイム。

苦手な方はバックプリーズ！

四話 イツワリノエミ

「閻魔あ今日がっことーすんのお？」

「休むよ・・・やっぱキツイや・・・」

妹子達を無理やり学校に追いやって、閻魔と家に残った。

鬼男と妹子に生徒会の仕事すべてを任せるのは、可哀想かなと思っただけけど、今閻魔の元を離れると・・・嫌な思いが脳裏をよぎる。

「太子・・・これを・・・」

私が家に持つて帰ってきた分の仕事をやっていると、閻魔は素直に手伝ってくれた。

閻魔がわたした資料を受け取ろうと手を出した。

ところが、私は間違えて鋏を握っていたほうの手を出してしまったんだ。

閻魔の指の先が赤く染まっていく。

その赤が閻魔の腕を伝って床を濡らした。

「うわああああっ！！痛い、痛いよおおっ！！助けてええっ！！」

「え、閻魔！？ごめんっ、ちがっ・・・わざとじゃ・・・！！」

「あ・・・あ・・・うああっ！！と、父さんっ、父さん助けてっ！」

「え？」

「やだやだやだ！金なんて持ってないよおおっ！あ・・・！
ひ・・・引き出しの中！もうやだそれあげるからどっかいってよお
お！」

うずくまって叫びつづける閻魔に私はどうすることもできない・・・。
何をすればいいか分からない。

「閻魔・・・閻魔・・・ごめんね・・・？」

私はふらふらと閻魔の元に寄り、庇うように抱きしめた。

「ごめん・・・！大丈夫だよ・・・なにもしないから・・・閻魔を
傷つける奴なんていないよ・・・」

「うとうう・・・やだよ・・・父さん・・・」

「父さんが助けてやるよ、お前を守ってやるから・・・」

「・・・父さん？・・・父さん・・・」

私が意図的に言ったんじゃない・・・勝手に言葉が出てきた。
・・・閻魔の父は優しくかったんだと、鬼男がいつか言ってた
気がする。

そんなことが起こってから、数日たったある日、ある噂が私の耳に入った。

「私の叔父が・・・この町に・・・？」

それがやがて、大惨事を引き起こすことになるうとは誰も知らなかった。

四話 イツワリノエミ（後書き）

さあ・・・この後は惨劇が惨劇を招く最悪なものになってきます・・・。

不幸な連鎖。

この連鎖の発端は太子の叔父が帰ってきたからです。

その連鎖に、連鎖を重ねたのはだれか・・・？

これが今後の話のメインです。

五話 クルイハジメタハゲルマ（前書き）

ついにメインに近づいてきました・・・

そしてついにオリキャラ登場！

苦手な方はバックプリーズ！

五話 クルイハジメタハゲルマ

（叔父は何の為に帰ってきた？）

学校の帰りに耳にした・・・聖徳の兄が帰ってきた・・・という噂。

（叔父が私を・・・！！？・・・いや、まさか。）

そもそも叔父が本当に帰ってきているかどうか分からないのに。

「あ、太子さん、何かあなたの叔父と名乗る人がさっき訪ねてきましたよ？」

「え・・・本当？」

帰ってからすぐに尋ねられた。

全身を虫が這うような感じがする。

まさか

まさか本当に・・・？

「お・・・鬼男、今度その人が来たら・・・私は・・・殺される・・・

」

「えっ？・・・何ですか！？人当たりのよさそうな方でしたよ？」

「駄目だ、奴は・・・私の親を殺した奴を・・・探しに来てるから・・・てかそれが私なんだけど・・・」

（叔父を跡形もなく殺すなんて無理だ・・・例え出来ても、今度は叔母が・・・いやもしかしたらもっと大人数で来るかも・・・あいつは妹子や鬼男を人質にしてでも、私を探しに来る！！）

それから私は学校へ行かなくなった。

食べるのも嫌になった。

あの叔父がいる限り私はずっとこうしているだろう。

（みんなに言った方がいいんだろうか？私は・・・どうすればいい・・・？）

「本当に私を・・・私を探しに来たのか・・・？」

「太子の叔父さんが訪ねてきた？」

「まあ・・・太子さんの話によると・・・ですけど。」

「殺されるから学校にこないんですか？」

「分からないけど・・・妹子何か知らないのか？」

「さあ・・・？」

閻魔達は太子の突然の登校拒否について話し合っていた。

「じゃあ、太子の叔父さん殺しちゃえば？」

「太子さんに聞いてみましょうか、今日。」

「まあ、それもそうだね。」

閻魔が時計を見ると、もう予鈴が鳴るころだった。

「あ、っと・・・教室に戻らなきゃ・・・じゃーね年下共！」

「名前を呼べ！」

「あ、僕学校に忘れ物を・・・とってきますから、二人で先に帰ってください。」

「分かったー！」

「ほら！前見て歩いてください！」

「今日は陽が落ちるのがやけに早いですね。」

突然声がしたかと思うと、後ろには曾良が立っていた。

「曾良！何してたんだよ？」

「いえ、太子さんの叔父が帰ってきたという噂を耳にしたものですから……」

「え、ああ……それで何か探してた？」

「その方の家……ですかね。」

「見つかった？」

妹子の問いに曾良は首を左右に振った。

「陽が落ちる前に見つけたかったんですが……。」

「それで……どうする？もう帰る？」

「いえ、8時ごろに帰ります。それまで聞き込みでもしますかね……」

。。」

曾良は二人の横を通り抜けて、人混みにきえた。

「それにしても叔父さんっていったいどんな人なんだろうね？」

「さあ・・・僕も聞いたことないですし・・・。」

蝉の鳴き声が小さくなってくる。

「・・・妹ちゃん、あれ誰？」

「はい？」

指さされたほうに目を向けると、そこには妹子たちの部屋の前で佇む男がいた。

「・・・・・・・・もしかして、あれが叔父ですかね？」

「まさか。」

すると、その叔父が閻魔達に気付いたのか、こっちに向かってくる。そして、二人に話しかけた。

「すみません、太子のお友達ですか？」

「え、まあ、はい。」

「いや、変な人ではないですよ。私、太子の叔父の豊日と申します。昔にいなくなつた甥が、生きている、という噂を聞いて。」

（太子を探しているというのは本当だ・・・）

「あの・・・太子は学校に来てませんでしたし、僕たちは休みの分のプリントを渡しにきただけです・・・」

「！！・・・そうですか？でもお二人とも学年が違つようですが・・・仲が良いんですね。」

「だから、何ですか。太子はたぶん風邪でも引いてるんですよ。今日の所は帰つたら・・・」

「嘘はいけませんね、嘘は。甥は何人かと一緒に住んでいると聞きました。名前ももう分かつてるんです・・・。たしか・・・妹子さんと閻魔さんと・・・曾良さん、鬼男さん、ですよね？」

「！？」

「貴方がたがその中の誰であろうと関係ありません。甥はどこにいるのが聞きたいだけです・・・」

同居してて、それでも居場所が分からないなら仕方ありませんが。」

「家には、いなかったんですか。」

「チャイムを鳴らしても誰も出てきませんでした。・・・早く場所を教えてください。」

妹子が言い返そうとしたその時、後ろから腕を掴まれた。

驚いて振りほどこうとするが、全く振りほどけない。

「離せよっ!!っ・・・誰だ!!」

慌てて喚き散らすと、相手はそつと妹子の首に何かを当てた。

「年上の方、場所を教えてくださいたらこの子は放します。教えて下さらないのなら・・・わかりますよね？」

「っ・・・お前・・・そこまで!!」

「どうするんですか？」

「閻魔さん!!僕は大丈夫ですから、絶対に喋らないでください!」

閻魔は分かったと言うように頷く。

「・・・はあ。ここまでしても教えて下さらないとは。面倒な子供だ。」

「!?!」

「閻魔さんですね?・・・少しお休みいただきます。」

「はあ!?!・・・っ・・・!!」

豊日は閻魔の腹を思い切り殴ると、気絶させた。

「え・・・閻魔さっ・・・」

「あせらなくても大丈夫ですよ・・・ちよつと悪ふざけがすぎたよ
うで。殺すなんてこと、私には到底無理ですから。」

そのまま豊日は高笑いしながら車に乗った。

それと同時に妹子の拘束も解けて、妹子はそのまま座り込んだ。

「今日はすいませんでした。甥に、私が探していると伝えといてく
ださい。」

それだけ言つと、豊日は車を走らせ、帰って行つた。

五話 クルイハジメタハゲルマ（後書き）

この豊日の強引な「手段」こそが第一の惨劇だと言っていていいでしょう。

さほどたいしたことではないのに、これを悲劇だと勘違いしている太子は真実に気づくことができるでしょうか？

豊日の手段を閻魔は冗談だと受け止められるでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0032i/>

狂イ始メタ歯車。

2010年10月9日11時15分発行